

38 中国伝統医学と道教 (第二十二回)

「祝由」

吉 元 昭 治

「祝由」という言葉は『黄帝内経素問』移精變氣論篇に

「余聞古之治病、惟其移精變氣、可祝由而已」「所以小病必甚、大病必死。故祝由不能已也」

『黄帝内経靈樞』賊風篇に

「先巫者、因知百病之勝、先知其病之所從生者、可祝而已也」
と出でくる。

祝由とは最も古い病を癒す方法の一つで、病を降すと信じられていた天や神に祈り、おはらいするまじない、巫術的なものであった。後になると、薬物や鍼灸などを用いず、専門的に従事し符咒治病する専門職が生れてくる。祝由科である。

巫術は巫医が病を癒すことに専念していたが多分に精

神的療法であり、符・祝(祈り)・祭祀がその中心であった。巫医はさらに方士による方術を手段とし、道教の興隆とともに道士にその一端はにぎられ、さらに医療の一部にくみこまれていく。

隋の医療制度には医師・薬園師・按摩博士・祝禁博士などが、唐代では薬園師・医師・典薬・鍼工・按摩工・咒禁師が、さらに時代が下って明代になると「明の十三科」というシステムが出来てくる。すなわち大方脈・小方脈・婦人・瘡瘍・針灸・眼・口齒・接骨・傷寒・咽喉・金鏃・按摩と祝由科が名をつらねている。

我が国の律令時代の医療システムと比較してみる。

まず中務省の下に陰陽寮があり中に陰陽師・曆・天文・漏刻博士などがいて別に内薬司という中に侍医がいた。

一方、宮内省の管轄に典薬寮があつて、医・針・按摩・咒禁博士などの他に薬園師がいた。この咒禁博士、咒禁師の職能は中国の祝禁・咒禁・祝由と同じものと思われるが、中国でもそうであつたように時代と共に有名無実になっていく運命にあり、我が国の咒禁関係は陰陽寮に吸収されていき、陰陽道の中にその姿をかいまみるよう

になってくる。

祝由科について『諸橋大漢和辞典』には、こう記されている。

符呪によって病を癒すものをいう。此の方法は湖南辰州府地方は盛行していたから辰州符（辰州符をひくと祝由科の別称。まじないで人の病を癒すもの。多くの辰州符の人がこの術を伝えたのでかくいうとある）ともいう。また越方（浙江省の古名を越）というまじないの術であるとも記している。

ここで祝由（科）に関連する文献をあげその中からえらんで総合を発表したい。

○『正統道藏』。「靈宝領濟度金書」「修真精義推論」「太上洞玄靈宝素靈真符」「靈宝領教濟度金書」「无上黄籙齋立成儀」「靈宝玉鑑」「上清天心正法」「太上老君五斗金章受生經」「太上老君混元三部符」「秘藏道玄變化六陰洞微遁甲真經」「太上除三尸九虫保生經」「金鎖流珠引」「無上秘要」「法海遺珠」「高上神霄玉清真王紫青大法」「道法會元」「上清靈宝大法」「太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經」「靈宝玉鑑」「太上助国救民總真秘要」「度人妙經」など。

○『辰州符呪大全』「鎮庄之類」「祈禱之類」「詔召之類」「医治之類」

○『靈驗神符大觀』「祝由科」

○『符咒全書』「祝由科」

○『奇難雜症醫術秘伝』「祝由科」

○『軒輅黃帝祝由十三科』

○『藏外道書』第二十六冊「祝由醫學十三科」

○『聖濟總録』卷一九五「符禁門」

○『太平經合校』「神祝文訣第七十五」

なお『清明上河図』の一隅に「祝由科」の看板が出ている家屋が見られるので宋代頃には民間にも「祝由科」があったのではないかと考えられる。

（吉元医院）